

2026 年 4 月 30 日

日本災害復興学会 2024 年度研究会
活 動 実 績 報 告 書

<研究会名称>

災害復興とケアの研究会

代表者	土田亮
企画分担者	大津山堅介
	高森順子
	辻本侑生
	望月美希

<添付資料>

- ・活動に関する資料（パンフレット等）がございましたら、添付のうえご提出願います。

1. 本助成により実施した研究活動の全体概要

本助成により実施した研究活動のアウトラインを記入してください。なお、各項目における記入方法は、上段には概要を箇条書きで2行程度にまとめていただき、下段には、その内容を記入してください。

【課題、目的】 この研究活動を行った動機や目的を記入してください。
・本研究会では、人文社会科学分野で急速に議論が進んでいるケア研究の視点を災害復興研究に導入することを目指し、複数分野の研究者が自身の研究やフィールド、実践事例を交えて議論する。
本研究会では、コロナ禍やフェミニズム思想の導入・普及に伴い人文社会科学分野で急速に議論が進んでいるケア研究の視点を災害復興研究に導入することを目指す。複数分野の研究者が自身の研究やフィールド、実践事例を交えて議論することで、ケアをどのように捉え、いかに分析の枠組みに取り入れうるかを共有し、ケア概念の射程と可能性を再考する場とする。 これらの議論を通じて、従来の災害復興研究において顕在化してこなかった、あるいは分析の対象とされてこなかった諸実践や理念を、多義的なケアの視点から捉え直し、災害復興の文脈に再度位置づける。ひいては、被災地のみならず、未災地における備えや理解にも資する、新たなケア概念の構築を図る。



【実施方法、内容】 この研究活動の実施方法、内容を記入してください。
・各年度に対面ないしオンラインでの研究会を2回行い、ケアと災害復興に関する総合的な議論を図った。
本研究会では、これらの議論に対してケアを介護・世話・配慮・気づかいといった直接的な訳語、ケアする／されるといった二項対立的な理解を一時的に解きほぐし、具体的な実践や経験、場、関係性などを出発点として災害復興における多義的なケアの諸相を捉え直すことを試みた。例えば、これまでの研究や実践をケアとして捉えることによってもたらされる視座や言葉・見方の豊かさとは何か。それはケアという概念や倫理でなければ、捉えられないことであるのか。また、制度のなかのケアと制度外のケアの相補的でありながら全体を成さないケアの関係性を専門やフィールドからどう考えるのかという全体に通底する問いを据えた。これらの問いに応答する形で、各年度に対面ないしオンラインでの研究会を2回行い、ケアと災害復興に関する総合的な議論を図った。



【活動成果】 この研究活動で得られた成果を記入してください。 ・最終年度（2025 年）の日本災害復興学会において分科会を企画・開催した
本研究会の議論を通して、災害復興のさまざまな場面や状況、関係性からみえるケアの射程の広さが明らかになった。とりわけ共通して浮かび上がったのは、個人の生と社会の不安定さを前提に、人と人、そして人とモノ・環境・社会の関係性の中で生じる応答的かつ持続的な実践と倫理としてのケア出会った。それは、ケアを与える・施す者と与えられる者という非対称な構図にとどまらず、相互の変容を伴いながら場を生成し、よりよい方向を模索し調整し続ける過程を伴うことでもある。災害研究においては、カタストロフィや終わりの見えない復興のただなかにおいて、人びとが社会や関係性の綻びや個人の脆さ、葛藤のなかで自らの生や日常、存在、過程を意味づけ、確かめ合う関係性も含めて理解できることが共有できた。 この成果を、最終年度である 2025 年 10 月に日本災害復興学会阪神大会において分科会を企画し、研究会メンバーで発表することができた。

2. 本助成により実施された研究活動に関して補足説明することがあれば記入してください。

（例：実施した研究活動の社会的意義、独自性及び改善点、今後の活動予定等）

現在、研究会および分科会で発表した内容を取りまとめ、日本災害復興学会の学会誌「復興」に 2026 年中に特集号として投稿する予定である。 また研究会としての研究活動は終えたが、引き続き、研究会メンバーと緊密に研究内容や関心を共有し、今後継続的な共同研究や大型研究資金獲得も見据えている。
